法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-07-11

町工場世界の起源 ： 技能形成と起業志向

SAITO, Osamu / 斎藤, 修

(出版者 / Publisher)
法政大学経済学部学会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
The Hosei University Economic Review / 経済志林
(巻 / Volume)
73
(号 / Number)
4
(開始ページ / Start Page)
315
(終了ページ / End Page)
332
(発行年 / Year)
2006-03-03
(URL)
https://doi.org/10.15002/00001958

町工場世界の起源――技能形成と起業志向

斎　藤　　修

はじめに

尾高煌之助は名著『職人の世界・工場の世界』において，伝統的な職人の世界と近代的な工場の世界の歴史的関連を問うた。多様な資料を駆使したその検討は，明治における金属機械工業の生成過程において，伝統的な職人が近代的な技能工ないしは技術者に転化した事例は少ないこと，しかし少数派であっても，彼らが伝来の技能（スキル）を欧米のそれと接続させる重要な「インターフェイス機能」を担っていたことを示唆していた（尾高 2000）。このような認識は他のいくつかの研究にもみられるところとなり，素朴な断絶論はもはや成りたたないといってよいであろう（鈴木 1996，第 1 章；西成田 2004，2005）。もっとも，この時代に「工場」と称されたところの大部分は，近代的とはいいがたい，大都市あるいは地方の中小工場であった。その多くは，のちに町工場と呼ばれるようになったところの製造所であって，近代的な工場におけるよりもはるかに多くの職人と職人的な職工を擁していた。すなわち明治大正期においては，大工場とは異質の，伝統に根ざした，しかし伝統技術を維持するだけでもない混成型（ハイブリッド）の職人的職工の世界が存在していたとみてよいであろう。

それはたんに過渡的な世界ではなく，独自の発展様式を内在し，独特の仕事文化を創出していたにちがいない。明治から昭和にかけての基本動向

が近代的な技術と官僚制的な組織をそなえた大工場の発展であったことはたしかであるが，第二次世界大戦後の町工場が高い技術力を発揮したことから考えると，技能継承におけるクラフト的伝統が変質を遂げながらも中小工場において生命力を維持したこともまた事実だからである（尾高 1990）。また，町工場の世界は淘汰が激しい一方で，開業率の高いことも大工場の世界と異なる点であった。小池和男によれば，現代の中小企業労働者のなかには「同一職種のなかでいろいろな企業を経験し，やがて独立して起業する。失敗したらまた小企業にもどる。オーナーとサラリーマンの間を移動する」グループが存在するが，そのような行動パターンはかつての職人的職工には「あたりまえ」のことだったのである（小池 2005，181頁）。

本稿は，このような世界が創られつつあった時代における職人的職工の出自と技能形成の履歴，そして彼らの起業性向を検討の対象とする。それは，町工場世界（ワークショップ・カルチャア）の伝統の起源を探ることにほかならない。

1．問題の所在

この中小工場の世界を「伝統に根ざした」と形容する理由の一つは，旧来のフォーマルな徒弟制との歴史的関連が近代的金属機械工場の場合よりも密接であったと考えられるからである。具体的には，伝統的な徒弟奉公をへたものが工場の職工となる事例は中小工場のほうが多かったのではないかということである。もっとも，伝統的な職人親方は自営業であり，自営業には家業の継承という観念が強く，技能の継承もまた父親から直接であったので，最初の技能形成の場は家業であった可能性もある。たとえば，豊田佐吉の初職は大工であったが，大工職人としての技能と知識は父親から習得したのであって徒弟奉公に出たわけではなかった（田中 1933，61頁）。あるいは，最初の技能訓練は工場においてであったかもしれない。工場徒弟や見習工が渡りを経験後に，ある町工場に定着するというルート

も考えられる。それゆえ，本稿の課題の第一は，それぞれの修業履歴の比重を明らかにすることである。

第二に，地方の中小工場は当然として，大都市の中小工場にも農村出身者が多かったという事実がある。「東京の町工場は……地方から上京した者が開いたという例が多い。地方に行くと野鍛冶から転じた例が多くなる」と指摘されているように，農村とのつながりは無視できない（森 1981，49頁）。これらの場合，工場自体が徒弟教育の役割を演ずることとなる。尾高は1894年の愛知県農商課調査の個票データから，地域の少なからぬ数の工場において，日雇や年雇と並んで「年季」雇用が存在していたことを見出している。とくに鍋釜を製造していた宝飯郡豊川の中尾工場は，「徒弟ノ者ハ七ヶ年稽古 年期ヲ終リ 通勤又ハ他ヘ養子サレ 他ノ業ニ転スルモノモアリ」と報告している。徒弟は「土着ノ者」で，彼らを養成し，自工場の労働力を確保すると同時に「他へ養子」に出す，すなわち労働市場へ技能労働者を送り出していたことがわかる（尾高 1990，321-22頁）。都市の工場にも同様の役割を果したところが多かったようだ。たとえば，建築学者西山卯三の父卯之助は町工場主（その親は農村出身の船乗り）であったが，卯之助は大阪鉄工所に見習工として入り，修業後は渡りの期間をへて独立したのであった（西山 1997）。またノーリツ自転車の創業者岡本松造は，奈良県の農村から名古屋に出て，町工場に弟子入りをして，そこで学んだ技能を活かして鉄工所を開業した（尾高 2000，118-21頁；岡戸 1974）。これらの事例に共通しているのは，都市の工場が農村からの見習工に徒弟教育を施す機関として機能していたということである。先の愛知県農商課調査の報告には，中尾工場よりもだいぶ「近代的」な工場も含まれている。その一つ，名古屋市にあった林時計工場では見習工は「授業生」と呼ばれていたのである。東京の田中久重の工場なども同様の教育的機能をもっていたにちがいない。官営工場や大工場の工場徒弟制度とならんでこれら中小工場は，農村起源の，労働およびスキルへの態度を都市の町工場の世界へ転生させる媒介項だったのであろう（斎藤 2002，

216-26頁；斎藤 2005，537頁)。

第三に，いまみた西山卯之助や岡本松造の事例は，中小工場の職工に強い自営業志向があったことをも示唆している。伝統的な徒弟制の特質は年季制による技能養成とそれによる入職規制にあったが，それとともに，技能を獲得した職人＝職工の労働市場による異動と調達も重要な構成因子であった。ただ，その労働市場の先には独立創業というゴールがあった可能性がある。これは職人＝職工というよりは在来的なエンジニア――国産自動車の「第一号製作者」といわれた山羽虎夫――についていわれていることであるが，中岡哲郎は「明治工業史の最先端の部分に現れてくる工場や機関を，順々に渡り歩く」ものが少なからず存在していて，「このコースの最終仕上げは町工場の経営者となることであった」と指摘しているのである（中岡 1999，20-22頁；尾崎 1955，176-81頁)。

要約すれば，戦前日本における職人＝職工の出自と修業履歴，彼らのキャリア・パスとそのパターンを明らかにしたいというのが以下の節での課題である。

2．統計による観察

最初に，明治初年の職人的職業における親方と徒弟の比がどの程度であったのかをみておきたい。それはフォーマルな徒弟制がどの程度に機能していたかの，一つの指標だからである。

ただ，通常の職業統計から，職人とその徒弟の数と分布を明らかにするのはきわめて難しい。例外は統計院による1879（明治12）年末の調査である『甲斐国現在人別調』であろう（統計院 1882)。ここからは職業名とその産業分類だけではなく，雇用形態が判明する。たとえば手工業的な職業についてみると，それぞれの職名の欄の次に「同弟子及雇」と記された欄がある場合がある。これは，最初の職名が職人親方ないしは自営業者，次の欄が年季徒弟ということであろう。日雇契約の雇人は「日雇」と明記さ

表1　職人とその徒弟：1879年の山梨県

	甲府市		郡部		合計	
	職人	弟子及雇	職人	弟子及雇	職人	弟子及雇
本業者						
大工	179	13	1,066	6	1,245	19
左官	40	0	95	3	135	3
石工	11	0	77	0	88	0
指物職	95	7	67	1	162	8
桶工	93	5	171	3	264	8
鍛冶職	120	13	211	27	331	40
副業者						
大工	12	0	2,325	4	2,337	4
左官	1	0	356	1	357	1
石工	1	0	236	0	237	0
指物職	4	0	54	0	58	0
桶工	2	0	476	1	478	1
鍛冶職	5	0	193	5	198	5

出所：統計院（1882）.

註1）　鍛冶職は鍬鍛冶，鎌鍛冶，鋤鍛冶，諸農具鍛冶，包丁鍛冶，釘鍛冶，鑿鍛冶，鋸鍛冶，斧鍛冶，錠鍛冶，船具鍛冶，銅鍛冶，雑鍛冶の合計．このうち雑鍛冶がほぼ半数をしめる．なお，郡部の雑鍛冶198名には2名の女性を含む．

2）　職人には「一人前ニ足ラサル者」を含み，石工，雑鍛冶の場合には「手伝」をも含む．いずれも親方の家族である可能性が高い．

3）　甲府市・郡部双方における大工の場合と，甲府市の指物師の場合は「弟子」のみの数であるが，これらを除き「弟子」と「雇」の区分はできない．

れるのが，この統計の取り方だったからである。また，その雇用形態の統計を本業者・副業者別にとることができるのも『甲斐国現在人別調』の特色である。

そこで，手工業職人的な職業として大工，左官，石工，指物師，桶工，鍛冶職を選び，職人と徒弟の比を観察することにしよう。この時期の山梨県における工場ないし工場的な製造所は繊維産業と醸造業に集中していたので，これらの職種の有業者はすべて伝統的な職人（親方ないしは自営の職人家族）とみなしてさしつかえないはずである。表1には，この親方な

いしは自営の職人数と徒弟との数とを市郡別に掲げる。

ここから指摘できる第一のことは，職人の多くが副業者だったという事実である。それら副業者のほとんどは郡部在住であり，本業は農作であったろうから，いわゆる半農半工である。大工・左官・石工の建築職人や桶工の場合は，そのような半農半工の数が本業者――彼らのすべてが専業者というわけでもなかった――の数の二倍前後にたっした。それに比べて本業者の割合が高かったのは指物師と鍛冶屋で，その分だけ専業志向が強い職種であったといえるかもしれない。都市と郡部の割合でいうと，より都会的なのは指物職で，鍛冶職の場合には都会の三倍以上の数の鍛冶屋が郡部にいた。いわゆる野鍛冶である。

第二に，「弟子及雇」と表現された徒弟の数はきわめて少ない。単純に全職種の本業者と副業者を合わせて計算すれば，職人66人に徒弟１人の割合である。もっとも副業の職人についていた徒弟は例外であったようなので，本業者だけで計算をすると29人に１人とはなる。また職種別の違いは大きく，鍛冶職の場合は８人に１人である。この比率は野鍛冶でもあまり変わらない。一方，都市の大工は14人に徒弟１人であるが，村の大工の場合はほとんど徒弟を抱えていないのである。要するに，鍛冶屋を除けば，徒弟制はないに等しかった。技能訓練と入職規制を結合するところの制度は機能していなかったといってよい。その鍛冶職ですら，親方１人に徒弟１人の比率を大きく下回っていたわけであったから，大部分の職人は自分の家族縁者を手伝いとし，息子への技能の継承も自らが世帯内で行なっていたとみなければならない。

いうまでもなく，山梨県がどこまで代表的か，とくに甲府市が明治初年の都市における手工業世界をどこまで代表しえるかという問題はある。この点で参考になるのは，明治維新直後の東京市における工人と修業人の比は23人に１人という統計である（斎藤 2002，106頁より計算）。「工人」の構成も「修業人」の中身も判然としない大ざっぱな統計ではあるが，甲府市の状況が当時の都市と大きく異なるものではなかったとはいえそうであ

る。いいかえれば，明治初年の手工業世界における技能形成の場としては，私たちが考えていたよりも家業の比重が高かったのではないであろうか。

3．発明家の個人履歴による観察

もっとも，最初の技能訓練をうけた場が家業ではあっても，その後に渡りを行なう雇職人はいたかもしれない。それも伝統的な親方職人のあいだを渡り歩いただけではなく，新たに登場した工場の世界を経験したものもいた可能性はある。ただ，そのような職歴を職業統計から読みとることはできない。個人履歴を知るには何か別の資料によらざるをえないのである。

そこで本稿では，発明家の伝記資料を用いることとしたい。在来的な発明家には職人＝職工の世界の出が少なくなかったと考えられるからである（関 2003，第 4 章は，在来産業における技術革新の分析に同様のデータを用いていて参考になった）。『帝国発明家伝』上下巻（奈良 1930）と，その戦後版というべき『日本発明家伝』（特許新聞社 1961）からは計168名の発明家にかんする情報が得られる。彼らの個人履歴の確認には，類似の刊行物 2 点（牧野 1911，松原 1952），社史・個人伝記 3 点（田中 1933，久保田鉄工 1970，岡戸 1974），および当該発明家が創業し，現存する会社がある場合にはそのウェブサイトの創業者欄をも参考にした。ただ，この大部分のひとは中等・高等教育をうけた発明家である。彼らは学校教育の場で専門知識とスキルを身につけた人たちであって，ここで対象としている中小工場の職人＝職工とは異なった世界の住人である。それゆえ彼らは対象から外し，学歴は寺子屋あるいは小学校のみ，および教育歴が不詳の場合でも初等教育終了程度の水準をこえないと判断できる場合のみを対象とした（したがって，正規の教育をうけていなくても士族出身者は対象外とした）。このグループは42名からなり，「小卒発明家」データベースと

称することとする。このうち１名は出身と修業履歴のどちらも不明なので，実際に観察可能なのは41名。彼らの名前と発明品を生年順に掲げれば以下のとおりである（最後の３名は生年不詳）。

磯崎眠亀（機械製莚法），真崎照郷（麺類製造機），豊田佐吉（自動織機），中西金次郎（紋織機及紋紙製造機），田上順太郎（犂），長坂又兵衛（桑樹仕立法），島津源蔵（易反応性鉛粉製造法），久保田権四郎（鉄管金型鋳造装置），臼井喜一郎（自動給炭装置），池内栄吉（魚肉採取機），横山酉次（莚織機），古川平次郎（耙撈），吉田釟一郎（食料品包装皮消毒防水法），佐藤庄次郎（籾摺機），岡本松造（自転車），永田邦助（地下足袋），林総吉（稲麦扱機），長谷善一（撚糸機），逸見次郎（計算尺），岩田継清（脱稃機），北織喜三郎（ジャカード紋織機），伊藤嘉久（選穀機），伊藤嘉平治（胚芽米），水村常蔵（稲扱機），牛田清郎（噴霧器），河合小市（ピアノ響板），高北新治郎（犂），鈴木道雄（力織機），鈴木忠次郎（精麦装置），延原観太郎（避雷装置），山岡孫吉（内燃機関），津田喜次郎（浄水装置），本田菊太郎（紡績用篠糸牽伸装置），松本末太郎（正藍抜染法及染絣製造機），真壁富太郎（乾燥及冷凍装置），伊達新一（製茶仕上機用揉具），大西謙太郎（籾摺機），森沢信夫（写真植字機），西口利兵衛（編網機），八木佐太治（電燈信号及転轍），山越長七（性能検査器）

この41名を出身府県と生年とで分類したのが表２である。京都・大阪・東京への偏りはなく，西日本生れが多少多いものの，特定地域への集中はみられない。生年には1834（天保５）年から1901（明治43）年までの幅があり，初期コウホートには教育は寺子屋のみという例もみられる。けれども，41名中の過半数は1871年から1890年生れである。すなわち，教育と修業からみるかぎり典型的な明治人のサンプルといってよいであろう。

この41名の「小卒発明家」の多くは起業者でもある。彼らのうちで，最後まで職工ないしはそれに類した被雇用者の地位にあったものはきわめて少ない。確認できるのはわずか１名のみである。起業年不明のものが６例

表 2　小卒発明家サンプルの特性

生年	出生府県			計
	府	県		
	(京都・大阪・東京)	西日本	東日本	
1870年以前	1	5	2	8
1871-1890年	3	10	13	26
1891年以降	0	3	1	4
不明	1	2	0	3
計	5	20	16	41

出所：奈良（1930）および特許新聞社（1961）．詳細は本文を参照．
註：西日本と東日本の区分は近畿と中部地方の境とした．なお，北海道生れはゼロであった．

あるけれども，その１名を除く40名のほとんどは家業を引継いだか，自ら起業してその経営者となったかのどちらかであると思われる。これは，彼らが「発明家」として社会的に認知を受けた成功者であったことと無関係ではなく，この割合をもって現実の起業性向の反映とみなすことはできない。ただ，経営者となるまでの道筋はひとによって異なる。彼ら小卒発明家のサンプルを，伝記資料から情報を得やすい出自と修業履歴とによって分類を試みることとしたい。

ここで出自とは，生家の家業が農工商のいずれかであったかということである。ただ，必ずしもすべての伝記に父親の職業が記されているわけではないので，出身地が村か市町かを考慮しつつ推測を交えて判断した場合もある。もっとも，住所は町であっても農家の出であることがはっきりしている場合は農と分類し，農家であっても父親が製造業に従事していたと記述されている場合には半農半工としている。したがって41名は，農，半農半工，工，商の４つに分類できることとなる。

次に修業履歴は，自家，徒弟奉公，見習・手伝の三つに区分した。技能習得のために一定期間生家を離れたことがなく，父親から直接指導をうけたとみなされる場合が自家修業である。年季を定めた，伝統的な住込の徒弟奉公が第二の類型，そして工場や製造所に職工として入職し，そこで手

表3．小卒発明家の出自と修業履歴

出自	修業履歴				計
	自家	徒弟奉公	見習・手伝	不詳	
農家					
農	3	1	3	1	8
半農半工	3	2	5	0	10
非農					
工	11	1	4	1	17
商	3	0	1	2	6
計	20	4	13	4	41

出所：表2を参照．
註：出自も修業履歴も不明な1名を除く．

伝ないしは見習工として，あるいはオン・ザ・ジョブで技能を覚えた場合が第三の類型である。ただ，これら二つの境界線は必ずしも明瞭ではない。たとえば，尾高が紹介した愛知県農商課調査報告にある中尾工場の工場徒弟制は伝統的な徒弟制に近似していた事例であろう。工場徒弟制を採用している企業は第一次世界大戦以前には少なくなかったので（尾高1993，18-25頁），伝記資料にただ「徒弟」と書かれている場合には判断に苦しむこともある。ここでは，工場の職工として雇われたと判断されるかぎり第三の範疇に属すとみなすこととするが，現実には両者を区別し難い場合が多かったであろう。

このような基準によって41名の個人履歴を分類した結果が，表3である。農家出身，すなわち農と半農半工の合計が18名，工17名，商6名である。農村出身者のうち10名が半農半工であるので，生家が職人的な職業に従事していたということは重要な要因であったといえる。しかし，他方では，彼らの生家は農家と意識されており，また，ここで商工とした事例のなかには郡部の町場の職人と少数の農村非農専業者とが含まれていることを考慮すると，農村は無視できない重要性を示していたともいえる。

次に，修業履歴をみてまず気づくのは伝統的な徒弟修業の比重の低さで

あろう。最下行の計は，全事例中わずか4例，1割の比重しかなかったことを示す。4例は大工2名，野鍛冶1名，足袋職1である。このなかには，8年間の足袋製造の年季奉公を終えた後も親方のもとにとどまり，足袋づくり一筋の人生をおくった場合（永田栄助）もあるが，鈴木道雄のように，大工職人の徒弟となり，親方自身の織機づくりへの転換に伴って機械製造を覚え，やがて起業，さらには自動車製造へと踏み出した事例もある。伝統的といっても，仲間組合の規制が製品や技法の転換を阻害するというようなことはなかったのであろう。

逆に予想以上の比重をしめていたのが，自家修業のケースである。全事例のほぼ半数をしめる。そのなかでも専業職人の場合が目立つ。それも，刀鍛冶から，農機具製作，織機・繰糸機製造，帯地製造と多様である。そのなかには，鍛冶屋だった父の起こした理化学機器製作所を継承発展させた例（島津源蔵）もあれば，車大工から楽器づくりに転じた河合小市のような事例もみられる。彼らは市町出身が多かった。都市の職人家族は出身という点からみても重要なグループで，その子供がものづくりの技を身につける場は圧倒的に自家であったということなのである。もっとも農村にも自家修業の事例は少なくなく，先述の豊田佐吉は農家兼業の大工から織機づくりに転じたのであった。

最後の，工場における見習・手伝をへたグループもかなりの大きさである。ただ最初の入職先は多様で，町場の鉄工所から大阪の大工場，海軍工廠，さらには鉄道や製薬会社も含まれていた。大阪汽車仕上工から海軍工廠へ（津田喜次郎），大阪鉄工所から電気商会の工場をへて南満州鉄道電気部へ（延原観太郎）というように，いくつかの工場を渡り歩く事例もみられた。また，明らかに工場徒弟としての入職もあれば，一般工の場合もあった。合わせて13名になるが，そのうち8名が農村出身者であったことから考えると，農村から工場の世界への径路としてはそれがもっとも重要だったようである。

それぞれの小卒発明家の履歴は多様で，しかも径路変更が珍しくなかっ

た。そのなかでも主要な径路といえるのは，町場の自営商工業者の子供が自家修業をへて新たな事業に乗り出す場合と，農村から徒弟奉公によって，あるいは工場の見習工をへて技能を習得し，最終的に独立をする場合との二つであったということはできよう。

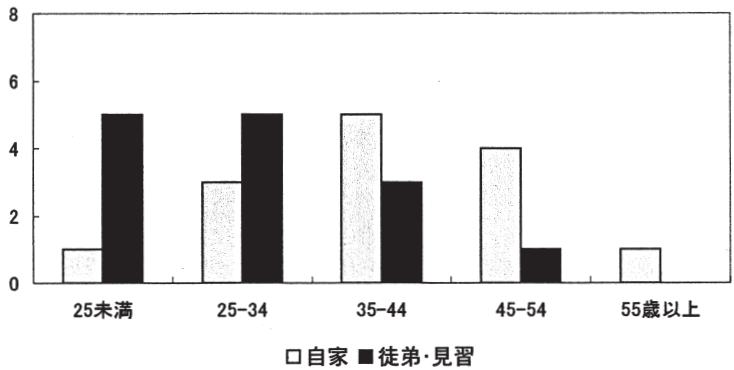
4．起業志向

最後に，これら径路の「最終仕上げ」としての起業についてみたい。小卒発明家データベースからわかるのは28名の起業時の年齢で，一見したところその年齢には大きなばらつきがある。そこで，起業年齢分布を就業形態別に図示すると図１のように，また出自別に図示すると図２のように，かなり截然と区分できることが判明する。図１では，かなり連続的であった徒弟奉公と工場見習ないしは手伝とを一緒にしているが，その径路をへたもののほうが自家修業の人たちよりも明瞭に起業年齢が低く，他方図２は，半農半工を含む農家出身者のほうが商工業者の子供よりも明瞭に起業が早かったことを示している。

ただ，徒弟・見習のコースは農家出身者に多かったので，両者をクロスさせてそれぞれ平均起業年齢を計算すると表４のようになる。すなわち，自家修業か徒弟・見習かという違いの影響は実際はあまり強くなく，農家出身か非農出身かの効果のほうが重要であったということである。統計的に有意な対比は農家出身で徒弟・見習の場合と非農で自家修業の場合のあいだにあり，前者だと平均26歳，後者では平均43歳での開業であった。起業年齢には顕著な相違があったのである。

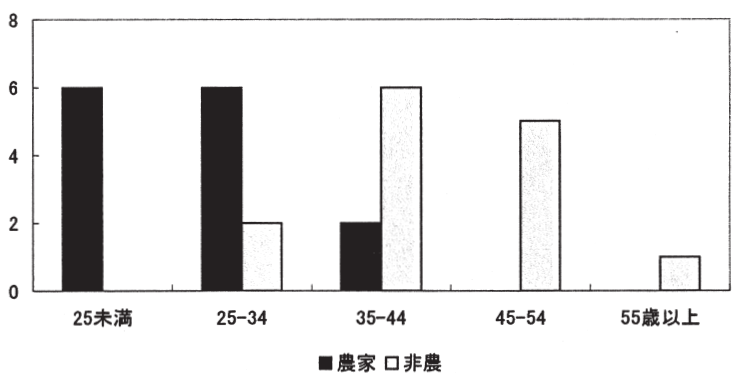
これはやや意外な結果である。起業意欲は農村出身者のほうが都市の自営業者よりも旺盛だったということなのであろうか。もっとも発明家についての観察なので，彼らの独立開業は発明をしたのが何歳のときかによって影響をうけるかもしれない。また，農村出身者には徒弟ないしは見習の期間を終了後，渡りをしないでただちに独立したいと思うひとが多かった

図1　修業履歴別の起業年齢分布



出所：表2を参照.
註1)　起業年齢と修業履歴のわかる28名を対象.
　2)　徒弟・見習には表3における「徒弟奉公」と「見習・手伝」の双方を含む.

図2　出自別の起業年齢分布



出所：表2を参照.
註1)　起業年齢と出自のわかる28名を対象.
　2)　農家には半農半工を含む.

可能性もある。そこで発明年齢が判明する事例から計算すると，農家出身で徒弟・見習の場合は29.1歳（SD＝2.95，N＝7），非農で自家修業の場合は35.6歳（SD＝10.2，N＝5）となる。たしかに発明年齢の低い前者で起業年齢は低く，発明年齢が高い後者で起業年齢も高いのではあるが，発明

表 4　修業履歴別・出自別の平均起業年齢

	修業履歴	
	自家	徒弟・見習
農家	31.8 歳	26.3 歳
	(SD=7.09, N=4)	(SD=6.77, N=10)
非農	43.3 歳	40.5 歳
	(SD=8.93, N=10)	(SD=8.06, N=4)

出所・註：表 2 および図1-2をみよ.

の場合は両者の差が統計的に有意でないうえに，農家出身の徒弟奉公・工場見習経験者の場合は自営業の場合と異なって，平均値でみるかぎり起業が先で発明は後なのである。

実際，発明年齢までわかる 7 名のうち 3 名がこのケースにあたる（他に，発明と起業が同時であった事例が 2 ある）。そのうち二人（鈴木道雄と池内栄吉）は奉公終了後ただちに独立を果したようであるが，それが一般的な傾向であったかどうかは疑わしい。他の一人は久保田鉄工の創業者久保田権四郎で，彼の履歴は少し異なったパターンを示しているからである。

久保田は数え年16歳で広島の農村から大阪に出てきて，看貫（かんかん）鋳物を製作していた黒尾製鋼に徒弟として住込んだ。3 年の年季も明け御礼奉公も勤め上げ後は，「更に鋳物一般の技術を習得して腕を磨くため」同じ大阪の塩見鋳物に入職したが，「その頃になると，彼の脳裏には既に独立創業の構想が画かれていた」という。「炉とズク（銑鉄）があれば，鋳物は吹ける」と云われたころで，「100円あれば，どうにか鋳物屋が開業できる計算だった」。彼は 1 年余でその100円を貯めて独立したのであった（久保田鉄工 1970，6-8頁）。この事例が物語っていることは，渡りには技能を磨くということ以外に，開業資金を貯めるという目的もあったということであろう。必要資金の額は職種によっても時代によっても，また他の資金調達手段があるかないかによっても変わる。したがって，渡りの期間もゼロか

ら10年，20年まで変わりえたということではないであろうか。いずれにせよ，徒弟修業の後，渡りを省略したから起業年齢が若くなったのでは必ずしもないということである。自営業出身に比べれば資金調達力の劣る農家出身者のほうが起業年齢が格段に若かったという事実は，明治においては，農家から徒弟・工場見習をへて町工場を起こした人たちの起業意欲には非常に強いものがあったといえそうである。

5．結論

小卒発明家の観察から明らかとなったのは，戦前の町工場における技能形成には，町場の自営業出身者が自家修業をへる径路と，農村から徒弟奉公あるいは工場見習をへて技能を習得した径路とがあったということである。いずれも起業にいたる場合がほとんどであったが，これは発明家をみたからで，実際にはそこまでいたらずにキャリアを終えることが多かったであろう。とくに後者では，中小工場の職工のまま終了という場合が圧倒的であったにちがいない。それゆえ，量的にみるかぎり，町工場世界の起源としては農村が重要であったといえそうである。

この農家出身の人たちは職工になることを目指したのであったが，彼らの多くは強い起業志向をも有していた。この観察結果も発明家の伝記資料によったがゆえといえるが，同じ小卒発明家サンプル中でも彼らは自営業出身者と比較して大幅に若い起業年齢を示していた事実は無視できない。起業および革新という観点からみれば両径路はともに重要な役割を演じたのであるが，近代日本の製造業を下支えした中小工場の世界をよりダイナミックとしたのは，農家から工場の世界を経由して町工場へというサイクルであったのかもしれない。

これは，町工場の仕事文化には農家の労働観が移転された可能性を示唆している。とくに，この時代の技能形成にたいするフォーマルな徒弟制の役割は小さかったという，本稿のもう一つの発見と考え合わせると，労働

観・技能（スキル）観の農家起源という仮説も成りたつように思われる。徳川時代以来の農業はそれ自体スキル集約的となる傾向があったという事実と，農家世帯内においては時間規律と擦合せのスキルが形成されつつあったということとは，町工場の世界におけるクラフト的技能と起業志向の結合を暗示しているからである。

《参考文献》

関権（2003），『近代日本のイノベーション――特許と経済発展』風行社.

小池和男（2005），『仕事の経済学』第３版，東洋経済新報社.

久保田鉄工株式会社（1970），『久保田鉄工八十年の歩み』久保田鉄工株式会社.

牧野輝智（1911），『現代発明家伝』東京書院.

松原憲太郎（1952），『日本発明家五拾傑選』発明図書刊行会.

森清（1981），『町工場――もうひとつの近代』朝日選書.

中岡哲郎（1999），『自動車が走った――技術と日本人』朝日選書.

奈良繁太郎（1930），『帝国発明家伝』上下，帝国発明家伝記刊行会.

西成田豊（2004），『経営と労働の明治維新――横須賀製鉄所･造船所を中心に』吉川弘文館.

西成田豊（2005），「明治中期地方都市機械工業の労働力構成――官営鉄道長野工場を中心に」『一橋大学研究年報 経済学研究』第47号，201-46頁.

西山卯三（1997），『安治川物語――鉄工職人卯之助と明治の大阪』日本経済評論社.

尾高煌之助（1990），「産業の担い手」，西川俊作・阿部武司編『産業化の時代』下，日本経済史４，岩波書店，303-50頁.

尾高煌之助（1993），『企業内教育の時代』岩波書店.

尾高煌之助（2000），『新版 職人の世界・工場の世界』NTT 出版（初版はリブロポート，1993年刊）.

岡戸武平（1974），『自転車万歳――ノーリツ88年の歩み』中部経済新聞社.

尾崎正久（1955），『自動車日本史』上下，自研社.

斎藤修（2002），『江戸と大阪――近代日本の都市起源』NTT 出版.

斎藤修（2005），「前近代成長の２つのパターン――徳川日本の比較史的位置」『社会経済史学』第70巻５号，519-39頁.

鈴木惇（1996），『明治の機械工業――その生成と展開』ミネルヴァ書房.

田中忠治（1933），『豊田佐吉伝』豊田佐吉翁正伝編纂所.
統計院（1879），『甲斐国現在人別調』統計院.
特許新聞社（1961），『日本発明家伝』特許新聞社.

Origins of Prewar Japan's Workshop Culture: Skill Formation and the Propensity to Start a Business

Osamu SAITO

《Abstract》

The work culture of prewar Japan's workshop industries (*machi-kōba*) is characterised by the persistence of traditional attitudes towards craft skills and the workers' high propensity to start a business on their own. This paper explores biographical information about 41 prewar 'inventors' (*hatsumeika*) of humble origins. They were born in the Meiji period or earlier. As successful men, most of them started their own manufacturing businesses (some of which became big businesses later), but all had only received an elementary education and were supposed to have worked in a workshop industry in the early stages of their career. A close scrutiny of their personal histories reveals, firstly, that formal apprenticeship of a traditional type did not play a significant role whereas factory apprenticeship did. Secondly, there were two groups of workshop worker-inventors: one group came from the countryside, i.e. from farm and/or part-time craftsman households, and the other, from self-employed craftsmen in towns and cities. The typical path to the workshop industry was through factory apprenticeship in the former group while it was training at home in the latter group. Thirdly, the rural-born, factory-apprenticed workers tended to start their own businesses at a substantially younger age than those who were urban-born and home-trained. In terms of numerical importance, moreover, the former outnumbered the latter. In other words, much of prewar Japan's workshop culture must have been of rural origin.